
祭の跡。言葉の痕。

曇底コオロギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祭の跡。言葉の痕。

【Nコード】

N5723A

【作者名】

曇底コオロギ

【あらすじ】

青春って奴は卑怯者だ。手に負えねー。その割に楽しいから厄介なです。

ぎらぎら輝く太陽の下で、ぼんやり疲れた顔をしていた二人。
ソーダ味は溶けようとしている。

海を目の前にして、二人は黙ってアイスをなめている。

その中学生二人は、恋人同士に見えなくもない。

「行かなくて良かったの？」

女の子が言った。

「いいんだ。俺、腹減ってないから」

「そっか」

アイスはいずれ無くなる物である。

陽は暮れるものである。

女の子は立ち上がった。スカートの砂を払う音が、空気を硬くする。

「わたし行くね」

「ああ、またな」

「次は学校かなあ。暇ならまた呼んでね」

呼べねーよ。

その時は、笑ってた気がする。いずれ陽は暮れるのになあ。

男の子はいつまでも、そこに座っている。

海を見つめて、あるいは睨まれているのか。

一歩も動けないでいる。買い出しの連中は、見事に空気をブチ壊してくる。

夜明けの太陽みたいな

「おい、アイツ帰っちゃったの？」

「ああ、なんか、帰った」

「なんだよー！何で？何話した？」

「なんも話してねーよ」

「マジでホント！？」

「暇だったら、また呼んでだって」

「ふーん」

間

「まー俺達って結構暇だよな」

「まーな」恰好つけていやがる。

海は青かったし。

みんなで食ったアイスは旨かった。

体は泥のように疲れていたし、夏の陽射しは狂ったように空気を暖めていたけど、あの娘は可愛かった。

アスファルトは僕らの影を映し出していた。

祭の後は、いつだって寂しい。陽はいつか暮れるのだ。

『次は、いつ暇？』

そして夜明けの太陽みたいに

（後書き）

みんな俺の中で生きています。アドバイス等あったら、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5723a/>

祭の跡。言葉の痕。

2011年1月16日03時28分発行